

大学図書館の当面の諸問題

——視聴覚資料を中心として——

大 鹿 實 秋

現在の図書館

現在の図書館は、社会事情の変化と発展の流れの外に、図書館という局限された壁の中に孤在することなく、知識の集積貯蔵所という過去概念から脱皮して、社会進歩の流れの真只中にあり、それを反映して現在に息吹いている。社会の変化・文化の発展はそのまま図書館の変遷であり、社会の日常の動きがそのまま図書館の動きである。さらには、図書館の動きが社会の動向を規制するという能動的な活動をする。図書館は、その外向的意欲と社会の要請とを織りまぜ、受動的に能動的につねに活動し変化してゆく。薬局は雑誌・文庫本等を店頭で陳列販売していても、やはり従来どおり薬局と呼ばれている。図書館は、昔の図書館にくらべて、静から動へ、内から外へ、個より大衆へとその動きは変化し、躍進している。しかし、図書館は

従来どおり親炙された呼称で呼ばれている。けれど、呼称はその歴史が古ければ古いほど、その指す意味概念の変遷は著しい。現在の図書館は、過去の図書館の殻を破りその面目を一新している。過去の図書館はすでにこの世に存在しないのである。

わが国の図書館は敗戦を契機として一大転換をしている。敗戦後の教育制度の変革は、あるものをあらしめた変革であったが、図書館の変革は、ないものをあらしめたもので、変革以上の革新・維新であった。歴史と伝統に胡座をかいた過去の図書館は死に、新しい図書館が誕生した。すなわち、敗戦後、図書館員養成機関は急激に拡充強化され、図書館員の再教育が行なわれる一方、昭和二十三年（一九四八）には国立国会図書館の設立をみ、図書館界多年の要望であった図書館法は昭和二十五年（一九五〇）四月三十日第七国会を通過して、公布された。昭和二十八年（一九五三）には学校図書館法が公布され、翌二十九年（一九五四）

にはこれの施行をみている。ないものをあらしめたわが国の図書館は、形の上でまず世界的水準に達したのである。日本の図書館が世界の図書館界に加入してその機能を果たすためには、世界図書館に共通の組織を形の上だけでもつことは最少限に必要なことであつたのである。さらに名実ともに世界的水準に達するためには、図書館員の養成・再訓練、施設・資料の拡大整備等の一層の強化によつて、図書館の内容充実を計らなければならなかつた。図書館過去十年の歩みは、大体この方面に充てられ一応の成功をおさめたのである。しかし、図書館本来の目的は世界的水準に達することではない。世界的水準をこえて、将来さらに飛躍的發展をするためには図書館の現状を熟視し、これを批判検討しなければならぬ。撰取されたものは、身体状況に即して、真の榮養となるように取捨選択されなければならない。これが図書館の今日の問題である。図書館の問題は、わが国最近の教育制度批判に通ずるものがある。しかし、これは新・旧教育制度の比較検討の上に立つ批判である。図書館の場合は、比較するに足る旧制度はなく、いきおい図書館法による新制度自体が検討批判の対象となる。新しい制度を批判検討した上で、新制度を絶対支持し、これを助長するのも将来図書館の進む一つの道であり、また、新制度を、真にわが国の国情に即したものに改変して再出発するのも図書館に与えられたいま一つの道である。図書館はこの岐路に直面している。いずれの道が、はたして近代図書館の真に生きる道である

大学図書館の当面の諸問題

うか。いまここでは、視聴覚資料を中心として、図書館が当面している二三の問題を論究せんとするものである。この試論によつて図書館の進むべき道を示唆することができれば幸いである。

図書館の定義

図書館の当面する諸問題を考察するにあつて、このように図書館のそもその定義から始めるといふことは、少くまわり道のそしりを免れないであろうが、その枝葉を論ずるためには、まずその根本が正確に把握されていなければならないからである。

図書館の定義は、図書館法第二条に「図書館とは、図書、記録その他必要な資料を収集し、整理し、保存して、一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設」と規定されている。しかし、この定義にあきたらず、各人各様の定義が行なわれているのが実情である。武田虎之助氏は、現在の、明日の図書館、いわゆる近代図書館を「図書館とは、記録された知的文化財を収集・組織・保存して、利用に供する社会機関である」と注意ぶかく定義されている。抽象的・包括的ではあるが、われわれはこの定義から、まず図書館構成の三要因、すなわち、資料・職員・施設を看取することができる。「記録された知的文化財」とは、資

料であり、これを「収集・組織・保存する」とは、主体についていえば職員であり、手段・場所についていえば施設である。

「利用に供する」とは、図書館利用者の存在はもちろん、新しい近代図書館の重要なサービス部門を暗示し、あわせて、博物館等の他の社会機関との相違をも明示している。さらにはこの定義から、知的文化財の保存と伝達という図書館の根本機能を行うことができる、この定義は簡にして要を得たものといふことができる。

武田氏はこの近代図書館の定義を、さらにつづけて具体的に説明されている。「記録された知的文化財」とは、図書・記録・図像・映像・録音などで、読む・見る・聞くというはたらきを通して、その意味・内容を、繰返して認識または鑑賞できる伝達を指す。これらの伝達材の中から、その図書館の目的に沿って、質量両面からの選択を通して集め蓄積して図書館資料を構成する。この図書館資料は、利用者が接触しやすいように組織化されて分類配列されて同時に適切な目録組織が用意されて一層見つけ出しやすいように用意される。保存は利用の前提であって、最善の状態に維持保全することであるが、拡充して解釈すれば、記録された知的文化財を後世に伝達する大きな機能のひとつこまでもある。利用に供することは、利用者の要求に反射的に資料等を提供することであり、利用者とは願在利用者のほかに、未利用者層の開発をもふくめて、心理的には利用可能者のすべてを指している。社会機関とは、記録された知的文化財

を制御して蓄積し伝達する社会制度を施行するための機関であって、教育のための学校・客貨輸送のための鉄道のような意味である」。図書館法第二条に比較して、実に理路整然としていて明快、読者をして図書館の姿を髣髴せしめずにはおかぬ図書館定義である。

さて、図書館の当面する諸問題は、以上の定義からするも、図書館構成の三要因、資料・職員・施設に焦点をしばって論ずるのが妥当であろう。この図書館構成要因の三つは、つねに有機的関係にあつて、一を論ずれば他はおのずから解明される性質のものであるが、容器はあくまで容器であり、内含物は内含物であり、運転経営するものは決して容器・内含物と同一ではない。煩をいとわず、構成要因の二々について、図書館当面の問題を論じてみよう。

資 料

教養（＝教育・情報）・調査研究（美的鑑賞をふくむ）レクリエーションという図書館の機能を發揮するために、記録された知的文化財のうちから、それぞれの図書館の目的に即して、選択収集蓄積されたものが図書館資料である。図書館資料は、図書館構成三要因のうち、他の機関に類をみない図書館独自の、図書館に絶対不可欠の要因である。

図書館資料は、いわゆる図書のみで構成されるものでなく、

形態的にみて、図書的なものと非図書的なものとの二つの資料から成っている。表示すれば左の如くなっている。

1 図書資料

図書・逐次刊行物・記録（古文書・写本をふくむ）

2 図書以外の資料

i 特殊資料 (a) 小冊子・一枚刷・切り抜き・絵はがき・地図・額用複製画・写真などのいわゆる一枚物

(b) マイクロ写真類

ii 視聴覚資料 雛型類（地球儀その他の模型類）・実物（考古学資料・風俗習慣を知るための資料・郷土の特産物など）・標本・展示物・写真類・幻燈画・映画用フィルム・録音・紙芝居・美術品等

iii シンクロ資料 読・視・聴が同時に行なわれる資料で、読む部分と視る部分に加えて、録音盤や録音

シートを組み合わせたもの。

右の表は、一応、形態の上から図書館資料を分類したものであるが、図書館資料の性格は複雑をきわめ、しかく簡単なものではない。情報資料である新聞は発行形式からいえば逐次刊行物であり、図書形態を備えない折本であり、綴じられていない点では特殊資料に属する。次には絵図である。それには一枚図もあれば折図もある。一枚図も加工すれば掛図となり、特殊加工を施せば掛軸・巻物・折本・屏風の類となる。したがって、

大学図書館の当面の諸問題

分類上の所屬も異なってくる。この分類では形態上の区分のほかに、読む資料・視る資料・聴く資料という区分をも分類の規準とした。図書以外の資料を、特殊資料・視聴覚資料・シンクロ資料の三つに分け、これらを一括しなかったのがそれである。

ところが、視聴覚資料というときは、特殊資料のうち明らかに印刷物と認められる小冊子・切り抜き等を除いて、図書以外の資料すべてを指すのが普通である。しかし、特殊資料のうち、(a)のいわゆる一枚ものと、(b)のマイクロ写真類とは形態こそともに図書ではないが、(a)の一枚ものはまとめあげれば図書となるべき性格のものであり、(b)のマイクロ写真類は、図書・逐次刊行物を原型におおぎ再生産されたものにすぎないのであり、観ると視るとの相違をも考え合わせれば、準図書資料（Semi-book materials）とも名づけらるべきもので、いわゆる視聴覚資料とはっきり区別されるべきものである。事実、マイクロ写真類は、ほかならぬ図書館をもっとも利用する研究者自身の必要によって発明されたものであり、研究者に所要の図書・逐次刊行物等の一部または全部をリプリントし、中世における書写・つい最近までのカメラ撮影にとつてかわったものである。これに対して、視聴覚装置は、すでに図書館以外の世界で発明発見され、進歩発達したものを図書館に移入したものであって、図書館自身の必要による所産ではない。以上の理由から、形態上、図書以外の資料に分類されるもののうち、特殊資料は

準図書とみなして、図書資料に数え、その他は一括して視聴覚資料に数えて、これと区別した。図書館資料は、したがって図書資料と非図書資料である視聴覚資料とに二大別され、この二つから構成されている。

図書資料と非図書資料

図書資料は総して印刷物 (Printed materials) と名づけられる文字の世界の資料であり、非図書資料は、すなわち視聴覚資料であり、視覚・聴覚の光と音の世界の資料である。この二つの資料を、図書館の使命である伝達の面から、比較検討してみよう。

伝達 (Communication) の構成要因としては、常識的に発信者・受信者・この両者を媒介する媒介体 (Media) および通信 (Message) すなわち、伝達される内容の四つがあげられる。図書系列資料の伝達についてこれを見れば、著者・編者などの発信者が、受信者である読者に向かって、印刷された文字記号を媒介体として、その知識・思想を発信する。この伝達方式においては、伝達される著者の知識・思想は、ひとたび文字記号に翻訳され、印刷されて読者に送達される。読者はこの視覚的・象徴的な文字記号を、生理的・心理的作用によって把握理解し、自己の思想・知識に還元する。ところで、著者の思想・知識は、著者が自己の体験によって把握したものであり、その

もの自体すでに原初的なものではなく、第二次的なものである。第二次的なものは翻訳されて文字記号となれば第三次的なものであり、読者が把握理解したものは第四次元の世界に属する。このように図書による伝達は複雑であり、間接的・抽象的である。これらの図書伝達の性格はそのままこの図書伝達方式の雑音、すなわち欠陥である。図書伝達は本質的には文字記号を唯一の媒介体とする。したがって、図書伝達においては、著者は正しい文字記号を発信し、読者はその発信された文字記号を正しく解読する能力をもつことが第一条件とされる。さらに、解読されるためには自己体験による想像力が必要とされる。そのためには、読者は積極的に解読しようとする意欲を駆り立てるように努力しなければならない。図書資料は積極的に読まれるべく読者の感覚に訴えるものでなく、読解するには訓練努力が必要である。つまり、この図書による伝達は、読解能力のない者、読解力があっても読解しようとする意欲のない者には成立しない。しかし、読者に文字記号を解読する能力があり、積極的に読解しようとする意欲があれば、読者は、その欲する時、欲する所において、適当に自己を制御しながら、適当な速度で読むことができる等の利点がある。さらには、読者は希望する内容を自由に選択することもできるし、静止して動くことのない文字記号は「読み返し」「読み直し」ができ、冷静に批判しながら読むことができるのも見逃すことのできない利点である。

これに対して、幻燈画・映画用フィルム・録音・ラジオ・テレビジョン等によって代表される視聴覚資料である非図書資料による伝達は、図書伝達が文字記号をその伝達の媒介体とするに対して、機械器具装置によって再現され再構成される音声・映像を伝達媒介体とする。したがって非図書資料の伝達は現実・自然の再現ではあるが、図書資料伝達の世界に比べれば、はるかに具体的・現実的・直接的・感覚的であり、極めて親近性に富み、積極的に聴視者の感覚の世界に侵入してくる。非図書伝達は、一つの資料はつねに多数の聴視者を予想し、広範性・同時性をその本質とする、いわゆる大衆伝達 (Mass communication) である。これは、同じく大衆伝達を目指してはいるが、一つの資料は一人の読者と対向するのを本質とし、多数の部数の発行あるいは時間の推移によって始めて多数の読者と対向できる、異時性の大衆伝達である図書伝達とは本質的に異なっている。したがって、同時性の非図書伝達においては、聴視者は、図書伝達における読者の如く読解する能力・読解する意欲等は必要とされないかわりに、自分の欲する時、欲する所で、自分の選択にまかせて、適度の速度で、繰り返し聴視することはむずかしい。したがって、聴視者はこの伝達方式においてはまったく受動的であるから、聴視者がその層を同じくし、興味を同じくする学校教育等においてはこの大衆伝達的方式は最適であるが、聴視者の層が異なっている場合には好適なものとはいえない。

大学図書館の当面の諸問題

さて、図書・非図書資料は伝達の面では上記のようにまったく対照的な相違を示すが、この異なった性格の二つの資料を協同させ長短相補い、その伝達機能を十二分に発揮させ、伝達の完璧を期することは図書館としてはまったく当を得た策である。しかしここで、図書館の伝達機能の完全を期するのに、はたして、(1)現在の図書館形態が最善であるか (2)運営面における障害は全然認められないか、という問題に当面せざるをえない。これらの問題を解明せずに現在の図書館のあり方を肯定することはできない。しばらくこの二つの問題について、それぞれ、施設、職員の面から追求してみよう。

施設

近代図書館の施設とは、図書館の建物・設備はもちろん、図書館の設置地域・奉仕の全地域を含めて、図書館資料利用の伝達網一切を指している。しかし、ここでは図書館の建物が特に問題になる。近代図書館の標準的な建物は次の要素から構成される。

A 閲覧のためのスペース

- (1) 目録室・レファレンスルーム・出納室・開架式書架室
- (2) 児童室・学生室・一般社会人室・特別研究室・新聞閲覧室・参考室・郷土資料室・主題部門別閲覧室・利用率の高い本の閲覧室・学習参考書閲覧室等

(3) 写真室・マイクロフィルム室
B 視聴覚活動・集会などのためのスペース

(1) 幻燈および映写室・器材室

(2) 音楽鑑賞室・録音室・試聴室等

(3) 大小集会室・映写設備付き講堂

C 館外活動のためのスペース

巡回・貸出文庫室・ブック・モバイル用書庫および附属事務室・同じく車庫

D 資料保管のためのスペース

書庫（一般書庫・貴重品書庫等）

E 管理および整理事務・作業のためのスペース

(1) 管理運営のための事務室・館長室・一般事務室（庶務・

会計等）・応接室・会議室・宿直室・小使室・受付

(2) 整理事務と作業のためのスペース

受入室・荷解室・整理事務室・印刷室・製本室・複写

室・暗室・倉庫・職員休憩室

F その他のスペース

玄関ホール・ロビー・展示室・談話室・廊下・階段・便所・食堂・下足所・荷物外套預所・電気室・機械室・車庫等

これらの要素は常に独立した室である必要はなく、規模の大小に応じて、あるいはさらに分化し、あるいは適当に兼用させることができる。A ないし D、および E の (2) のみが図書館独自の

の要素であり、他はすべて社会機関に普通の要素である。そして、B 項のみが非図書資料のためのスペースであり、その他のスペースはこれと切然と区分されて、すべて図書資料のためのスペースである。しかし、区分要素の項目が少ないということはそのままそれに要する敷地が少なくて済むということではない。現に、書庫が図書館全面積の四〇〜五〇%を占めるとすれば、残りの五〇〜六〇%を書庫以外の図書館諸施設が占めているのが現況である。そして大学図書館についていえば、A 項の閲覧座席数は在籍学生数の少なくとも一〇%が必要とされている。また一方、視聴覚資料伝達のために実際に必要とされるスペースは実に龐大なものである。それがために、非図書伝達のためのスペースを全然もてないか、もっているにも、図書伝達のためのスペースである本館からはるか離れて、分館形式で存在しているのがわが国における図書館の現況である。非図書資料は図書資料とは異質のものであって、図書資料にとってかわる性質のものでなく、図書は将来とも時代の要求に即応して、伝統的な図書の判型 (Format) を変えることはあっても、図書館に保管され狭い書庫の拡張を叫び続けるであろうし、研究の分化と情報活動の活発化と社会文明の発達が生み出すレジャー・タイムはマイクロ写真類——ここでは図書資料に数える——を始めとして図書館への需要を増大し、施設の拡大を要求するであろう。一方、視聴覚資料のための施設は、科学の発展とともに新しい視聴覚資料機器の相次ぐ出現をみ、これら新機器はそ

れぞれ広大なスペースを要求するために、ついには図書資料のための施設である図書館に比肩するほどの広大なものにまで発展するであろう。図書館利用者とは質を異にする、図書教材にあきたらぬ学生生徒等の団体・音楽愛好者・語学特に発音学研究者・読書力が低下し読書を不得意とする若い世代等の異なった利用者層の、視聴覚資料の異なった利用は、視聴覚資料施設の図書館からの分離独立を余儀なくするであろう。

さらに将来はともかく現状をみるに、大図書館は論外として、視聴覚資料のためのスペースをもたない学校図書館は、図書教材の充足のために教室あるいは講堂を兼用し、公共図書館は既存の公会堂等の施設を借用しているのが普通である。視聴覚資料は対向型の閲覧室システムではなく、教室・講堂等の一向型システムのスペースを必要としていて、異質の図書資料のための図書館には兼用のスペースをさらに見出せない。ここに視聴覚資料が施設の上だけでも図書館を離れて独立に存在すべき根拠をみることができるといえる。

視聴覚資料は、図書資料とは組織・保存法を異にし、伝達方式を異にし、利用者を異にしながら、なおかつ図書資料と同じ、記録された知的文化財であるというだけの理由で、図書資料とともに図書館に同居しなければならないとするのは、まったく伝統的信仰に拠るものであって、その信仰をもちあわせないわれわれ日本人にはまったく不可解な話である。

図書館は、従来どおり伝統的信仰に則って視聴覚資料を安易

大学図書館の当面の諸問題

に自己の傘下に収めるか、図書館百年の計に立脚して、視聴覚資料を図書資料と分ち、保管・伝達して阿資料の円満なる発展を計るかの岐路に直面する。断わるまでもなく、ここに論ぜられている図書館は、近代図書館として新発足する図書館ではなくて、在来の図書資料を中心として存続発展してきた図書館である。概してこのような図書館は新設・増設するに足るスペースも予算もたらず、近來とみに激増しつつある図書資料の応接に忙殺され、図書資料のための諸施設はすでに飽和状態に達し、その狭隘をかこちつつあるものが多い。この図書館が光・音、さらには、味・臭・触の五感の世界を通しての知識・経験の伝達を目論むいわゆる視聴覚資料をいかに受容・導入するかがいまの問題である。無限な資料は施設の新設・増設を無限に要請する。しかし、財源には限りがある。無限を受容するのに有限をもってしなければならないのが図書館の負うべき宿命であるならば、視聴覚資料の受容にあたっても、無限と有限との合理的な調整と合が行なわれなければならない。学校図書館の場合、安易ではあるが有効適切な暫定的手段としては、まず、既存施設の流用・兼用があげられる。教室・講堂・集会所等の視聴覚（教室）化がそれである。視聴覚装置を教室等に装備することである。視聴覚装置とその装備費が視聴覚資料受容に要する費用である。その他の費用としては、フィルム・レコード等の精選された視聴覚資料の（同質の学校が地域ごとにブロックを形成して）ブロックごとの協同購入、および、各学校ごと

の基準的な視聴覚資料の購入・維持保管等の費用が計上されれば足りよう。しかし、このような簡便な教室等の視聴覚化は、あくまで暫定的な措置であつて、視聴覚資料のあるべき本来のすがたではなく、また暫定的な措置に安坐できるほど視聴覚資料は軽視さるべきものではない。図書館は、この無限の発展を予想される重要な視聴覚資料を、現施設のままで、その傘下に取めて、よく近代図書館の実をあげ、健全な発展を遂げることができようか。既設の図書館に視聴覚資料を収容して、文字と五感による知識伝達の完全を期することは可能であろうか。始めから一石二鳥を狙うものは、しばしば二兎を追うの愚を犯すものである。一石二鳥は、あくまで結果論でなければならぬ。既設の図書館が視聴覚資料を受容するには、視聴覚資料のスケールはあまりにも大きすぎる。図書館が何らかの形において視聴覚資料を受容している現状は、これまたあくまで暫定的なものであり、既設図書館が発展的解消をしないかぎり、視聴覚資料は図書館と独立して、その親隣機関として存在すべきものであることをとくに強調しておきたい。

職 員

図書館職員は専門職員と所要の非専門職員とで構成される。専門職員は司書(司書補)であり、非専門職員は工員・用務員等々である。司書は大学(短大を含む)の卒業者にして、所定

の図書館学関係の学科を履修したものに与えられる職業上の呼称である。図書館学関係の学科を大学または講習において履修することによって、視聴覚資料を含めての蔵書の購入・目録作成・分類・運用・管理に関する複雑な、時には煩瑣な書誌的または専門的な業務に必要な基本的な能力が与えられる。ところが、図書館人の多くは、図書館における多年の実務・体験を重視して、司書講習等における基本学科の習得には重きをおかない。これは図書館における実務経験の過度の重視の結果とのみ認めるにはあまりにも重大な問題である。すなわち、この司書講習の関門を通ることなしには、いかに多年の図書館実務経験者といえども、司書たるの資格は与えられない、とは図書館法に定むるところであるからである。一般人と図書館専門職員との間に一線を画する司書講習——現実には各図書館ごとに施行される職員採用試験がそれであるが——とはいかなる性格のものであろうか。司書講習にも種々あり、一言をもって全体をおおうことはもとより危険であるが、あえて、一般的傾向を辿ってみよう。図書館人にはそれに必須不可欠な条件が種々要請されているが、司書講習は公開講習であり、受講者は図書館人として具備すべき条件を具えた、特定の選ばれた人間であることを要しない。これは、図書館員払底時代の図書館員養成機関の速成科の名残りを想起させるものがあり、実際に図書館人となるのはこの講習受講者のうちのほんの少数者にすぎない点からすれば、司書講習は図書館人のための講習というよりは、図書

館利用者のための講習という観がないでもない。さらに、司書講習の学科配当は、もっぱら図書資料を司る司書を対象としたものであって、非図書である視聴覚資料を司る司書のためにはあまり配慮されたものではない。それでいて、司書講習という類型は二つの異質の司書を生みだす。それでもなお、晚かれ早かれこの司書講習を通ることなしには司書資格はえられない。権威なきものが権威をもつこの非合理性は除去されなければならない。司書講習は、司書になるための図書館学入門講習であると同時に、司書のための再教育的講習でなければならぬ。法によって定められた司書講習は、国家のバックアップのもとに、講習内容も充実され、権威づけられてしかるべきである。権威ある講習にはじめて有為有能な図書館員を養成することができると。図書館は有為有能の図書館員によって運営されてはじめて、その実をあげることができる。

図書館のあるべき理想像を追いつつ、図書館特に大学図書館の当面している二三の問題を、視聴覚資料の処遇を中心に、問

大学図書館の当面の諸問題

題提起の形で扱ってみた。図書館百年の計は当面の脚下の問題を一々解決することから始めて、ひたすらに前進し、現実と理想とのギャップ百年を九十九年、九十年と縮少することに努めなければならない。現実を糊塗し過去に安坐することは許されない。

戦後、わが国の図書館は、図書館法の制定をみ、機会文明の発達と相俟って、大いに変化している。近代化の一路を辿っている。しかし、図書館はその外観・呼称が旧来のままであるためにこの内部変化が一般から看過されている傾きがある。このことは、図書館が生産機関ではなく、もっぱら消費利用機関であるために、図書館の運営面において、ひいては図書館発展の上に、大きな隘路となる。図書館は、図書館の理解者の協力なくしては図書館自体ではまるで無力である。図書館長には政治力ある逸材がその任に当てられるのもこれを裏書きするものと理解することができる。この拙論は、大学図書館の当面している二三の問題を扱ったものであるが、変貌しつつある大学図書館の一斑が理解される一助ともなりうれば幸いである。